

吉塚 12

— 吉塚遺跡第18次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1436集

2021

福岡市教育委員会

吉塚 12

— 吉塚遺跡第18次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1436集



調査番号 1907
遺跡略号 YSZ-18

2021
福岡市教育委員会

序

古くから玄界灘を介して大陸との交流が絶え間なくおこなわれ、文化交流の門戸として発展を遂げてきた福岡市には、歴史的遺産が数多く残されています。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、店舗建設に伴う吉塚遺跡第18次発掘調査について報告するものです。この調査では弥生時代から古代を中心とした井戸などの遺構を検出するとともに、縄文時代から中世にかけての遺物が多数出土しました。これらは地域の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、日本紙工株式会社 様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和3年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例　　言

1. 本書は博多区吉塚3丁目360番1地内の店舗建設に先立って福岡市教育委員会が実施した吉塚遺跡第18次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査と整理報告は三浦悠葵が担当した。遺構の実測は三浦、遺物の実測は三浦・山本麻里子、遺構・遺物の写真撮影、製図は三浦、編集・執筆は三浦が行った。
3. 本書で示す座標は、世界測地系を使用している。
4. 遺構の略号は、以下の通りである。
SE : 井戸 SK : 土坑 SP : 柱穴等 SD : 溝
5. 採図の縮尺は、各図に添付したスケールで示す。写真図版の縮尺は全て任意である。
6. 土器の実測図では、断面によって以下のように種類の違いを示した。
縄文土器・弥生土器・土師器 □ 須恵器 ■
7. 調査の出土遺物や実測図、写真などの記録類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管する予定であるので、広く活用されたい。

遺跡名	吉塚遺跡	遺跡登録番号	0123	分布地図番号	035 吉塚
次 数	18	調査番号	1907	略 号	YSZ-18
調査面積	230.3m ²	期 間	2019年4月12日～2019年6月6日		
調査地	福岡市博多区吉塚3丁目360番1				

目 次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の環境と立地	3
III. 調査の記録	5
1. 調査の方法と経緯	5
2. 調査の概要	5
3. 調査次の訂正	5
4. 遺構と遺物	7
1) 溝	7
2) 井戸	7
3) 土坑	10
4) その他の遺構・遺物	14
IV. まとめ	19

挿図目次

第1図 周辺の遺跡 (1/25,000)	2
第2図 吉塚遺跡 (1/15,000)	4
第3図 調査区配置図 (1/500)	4
第4図 基本層序	5
第5図 遺構配置図 (1/100)	6
第6図 SD0001・SD0093 (1/80・土層断面は1/40)	8
第7図 SD0001・SD0093出土遺物 (1/3)	9
第8図 SE0067 (1/40)	10
第9図 SE0067出土遺物 (1/3・1/2)	11
第10図 SE0112 (1/40)	11
第11図 SK0074 (1/40) および出土遺物 (1/3)	12
第12図 SK0099 (1/40) および出土遺物 (1/3)	13
第13図 SK0132 (1/40) および出土遺物 (1/3)	14
第14図 SP0152検出状況 (1/15) および出土遺物 (1/3)	15
第15図 SP0042・SP0084 (1/40) および出土遺物 (1/3)	16
第16図 その他の出土遺物① (1/3・1/2)	17
第17図 その他の出土遺物② (1/3)	18

図版目次

P L. 1 (1) 1区全景 (北東から)	
P L. 2 (1) 2区全景 (北東から)	
P L. 3 (1) SD0001土層断面 (東から) (3) SE0112 (北から) (5) SE0067井戸枠検出状況 (南から) (7) SK0142土層断面 (南から)	(2) SD0093土層断面 (北から) (4) SE0067 (東から) (6) SE0067井戸枠内完掘状況 (南東から) (8) SK0134土層断面 (北西から)
P L. 4 (1) SP0100検出状況 (西から) (3) 出土遺物 ①	(2) SP0152検出状況 (北西から)
P L. 5 (1) 出土遺物 ②	
P L. 6 (1) 出土遺物 ③	

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区吉塚3丁目360番1の一部における店舗建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成30年9月14日付で受理した。

これを受け埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である吉塚遺跡に含まれていること、確認調査が実施され現地表面下55cmで遺構が確認されていることから、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。

その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、建物建設部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成31年4月1日付で日本紙工株式会社を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年4月10日から発掘調査を、翌令和2年度に資料整理および報告書作成をおこなうこととなった。

2. 調査の組織

調査委託：日本紙工株式会社

調査主体：福岡市教育委員会

(発掘調査：平成31年度・資料整理：令和2年度)

調査総括：文化財活用部埋蔵文化財課 課長 菅波正人 (31・2年度)

同課調査第2係長 大塚紀宣 (31年度)

藏富士寛 (2年度)

事前審査： 同課事前審査係長 本田浩二郎 (31・2年度)

同課事前審査係主任文化財主事 田上勇一郎 (31・2年度)

同課事前審査係文化財主事 朝岡俊也 (31年度)

山本晃平 (2年度)

調査担当： 同課調査第2係文化財主事 三浦悠葵

庶務：文化財活用課

管理係長 藤川己 (31年度)

大森秋子 (2年度)

管理係 松原加奈枝 (31・2年度)



1. 吉塚遺跡 2. 箱崎遺跡 3. 吉塚本町遺跡 4. 吉塚祝町遺跡 5. 堅粕遺跡
6. 博多道路群 7. 東比恵三丁目遺跡

第1図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

II. 遺跡の環境と立地

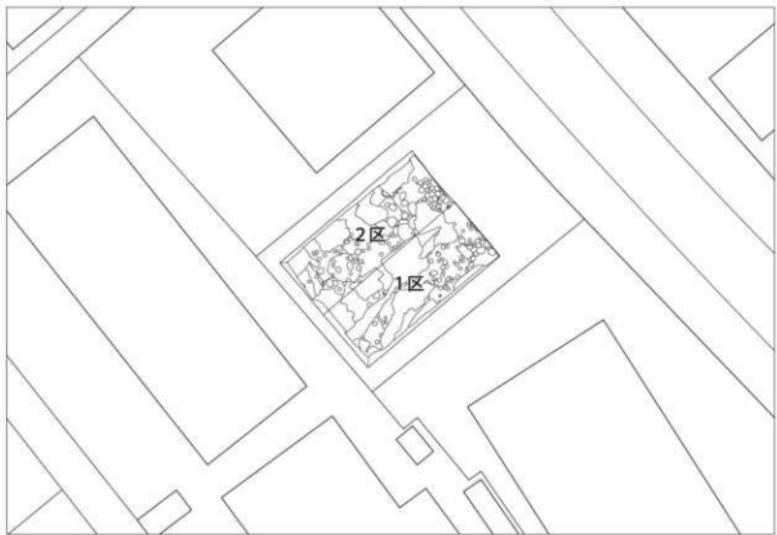
吉塚遺跡は御笠川下流域、博多湾に沿って東区箱崎から早良区百道にかけて形成された、箱崎砂層からなる砂丘上に立地する。この砂丘の形成期は自然科学的知見から、縄文時代晚期以降との評価が得られており、海岸に平行して複数の砂丘を形成している。吉塚遺跡を擁する砂丘はその中で最も内陸に位置する。周辺には西に博多遺跡群、北西に堅粕遺跡、北に吉塚本町遺跡、北東に吉塚祝町遺跡、東に箱崎遺跡があり、南東は後背湿地となる。遺跡北西側の堅粕遺跡は別の砂丘上に立地する弥生時代から中世にかけた遺跡であり、これまで11次の調査が行われている。越州窯系青磁、緑釉陶器、瓦、墨書き土器などが出土していることから、古代の公的施設が存在した可能性が考えられる。また、古墳時代の方形周溝墓や古墳時代後期の馬具を副葬した土壙墓なども確認されている。北側の吉塚本町遺跡は弥生時代から古代にかけた遺跡であり、これまで5次の調査が行われている。古墳時代には漁労工具や製塙土器などの海や海浜部に関連する遺物が見られる。古代には瓦や硯などの遺物が見られ、公的施設が存在した可能性が考えられる。また、遺構に伴わないものの、縄文時代晚期の粗製甕や打製石斧が出土している。北東側の吉塚祝町遺跡は弥生時代から中世にかけた遺跡であり、これまで3次の調査が行われている、越州窯青磁などの貿易陶磁器が出土した他、中世の大型の溝や土師皿の大量廃棄遺構などが見られ、博多の周辺集落としての性格が指摘されている。

吉塚遺跡は令和2年度までに18次の調査が行われており、これまでに弥生時代から中世にかける遺構を検出している。また、吉塚遺跡の中央付近には平安時代の創建とされる東光院が立地する。弥生時代には竪穴住居跡・井戸といった明確な生活遺構の検出はないものの、中期から後期を中心とした土器の他に、貨泉、銅鏡、山陰系土器といった特徴的な遺物が出土していることから、生活圏があつたことがうかがわれる。古代には建物や井戸といった遺構を検出しており、土師器や須恵器などの土器の他に、須恵器の形態・技法をまねた「赤焼土器」が多数出土している。中世には井戸を中心とした遺構を検出しており、土師器の他、貿易陶磁器が出土している。ただし貿易陶磁器は近隣の博多遺跡群や箱崎遺跡群と比較して出土数が限られ、二つの遺跡に挟まれた場所に立地する周辺集落としての様相を呈す。

今回の調査は第18次調査であり、吉塚遺跡の北東端に位置する。周辺では南西側で第7次調査、南東側で第5次調査が行われており、古代から中世に至る遺構と弥生時代から中世にかける遺物が出土している。



第2図 吉塚遺跡 (S=1/15,000)



第3図 調査区配置図 (S=1/500)

III. 調査の記録

1. 調査の方法と経緯

調査区は廃土処理の都合上、第3図のように南北に分け、南側を1区、北側を2区として調査を実施した。4月10日に機材搬入と重機による1区の表土掘削を行い、5月9日まで1区を精査した。9日から10日に1区の埋め戻しと2区の表土掘削を行い、6月4日まで2区の精査、5日には調査を終えて埋め戻し、6日に機材搬出を行い全ての調査を終了した。調査にあたっては後述するⅢ層までを重機で掘削し、Ⅳ層以下の精査を人力で行った。

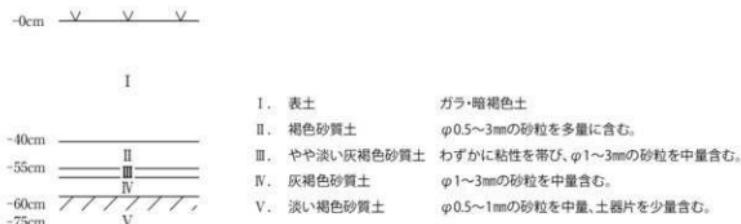
2. 調査の概要

第18次調査区は吉塚遺跡の北東端に位置する。現況は平坦で現況地表面は標高約3mを測る。客土の下、地表下45cmで暗褐色砂質土（Ⅱ層）、55cmでやや淡い灰褐色砂質土（Ⅲ層）、60cmで灰褐色砂質土の包含層（Ⅳ層）となり、75cm淡い褐色砂質土の地山面（V層）を検出した。調査地西側はⅡ・Ⅲ層が削平されており、客土直下である地表下40cmでV層を検出した。地山面は西から東へ緩やかに傾斜する。

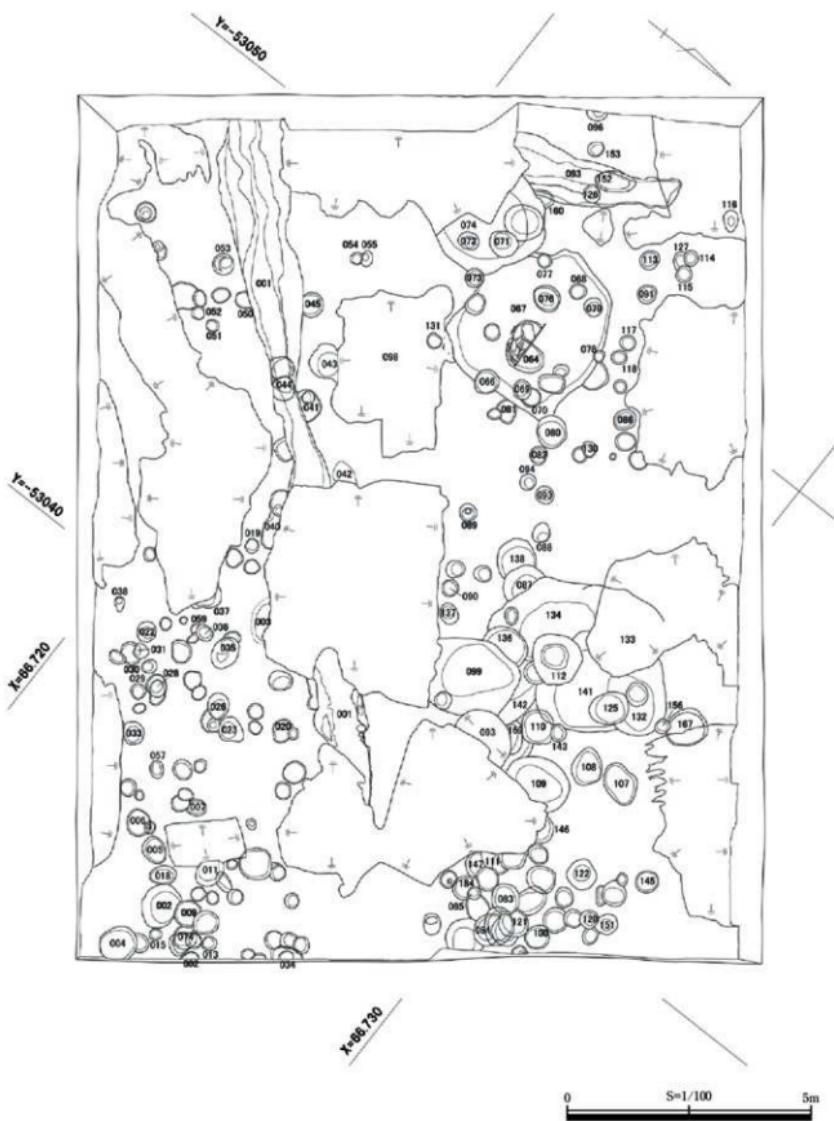
主な遺構は古代の土坑・井戸などである。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器を中心コンテナケース12箱ほど出土した。遺構の時期は異なるものの、少量の縄文土器も出土している。

3. 調査次数の訂正

平成31（2019）年の調査開始時、今回の発掘調査を第15次調査としていたが、平成28（2016）年度に博多区吉塚3丁目445番5地内にて既に第15次調査が行われており、次数に重複があることが判明した。令和2年度までに第16次調査・第17次調査が既に実施されていることから、以後の整理・報告に際して混乱を避けるため、今回報告する調査は第18次調査として報告を行うこととする。



第4図 基本層序



第5図 遺構配置図 (1/100)

4. 遺構と遺物

1) 溝　2条の溝を検出した。

SD0001 (第6図)

調査区西側で検出した。検出長14.2mを測る南北方向の溝であり、主軸は42°東偏する。北端は調査区外へと続き、南端は擾乱により明確ではないが、調査区南側に続かないことから擾乱内で収束するようである。幅50~110cm、検出面から底面までの深さは30~40cmを測り、断面形は不整形なV~U字状を呈し、溝底面には多数の植物生痕が見られる。埋土は暗褐色砂を主体とする。遺物は土師器を主体とし縄文土器、弥生土器、須恵器、るつぼなどが出土した。遺構の時期は6世紀末~7世紀初頭頃。

出土遺物 (第7図)

1は縄文土器の深鉢。口縁部から胴部にかけて残存する。口縁は外反し外面全体に貝殻条痕を施す。時期は縄文時代後期。

SD0093 (第6図)

調査区北東側で検出した。検出長3.5mを測る北西から南東方向の溝であり、主軸は26°西偏する。西側は擾乱により消失するが、1区で検出されなかったことから、擾乱内で収束するようである。幅60~100cm、検出面から底面までの深さは5~20cmを測り、断面形は浅いすり鉢状を呈し、埋土は暗褐色砂を主体とする。遺物は土師器が出土した。遺構の時期は6世紀末~7世紀初頭頃か。

出土遺物 (第7図)

2は弥生土器の壺。頸部から胴部にかけて残存しており、頸部に螺旋状の粘土帯がめぐり、胴部は丸みを帯びる。内面全体を斜めハケ、外面に斜めハケ・縦ハケにより調整する。3・4は須恵器の壺。3は胴部最大径27.0cmを測る。内面は格子目、外面は同心円の当て具痕が残る。4は胴部最大径26.4cmを測る。内面は格子目、外面は同心円の当て具痕が残り、外面は左から右方向に均等にタタキを施す。3の破片はSE0067・SK0074、4の破片はSK0074でも出土しており、3・4共に流れ込みによるものと考えられる。

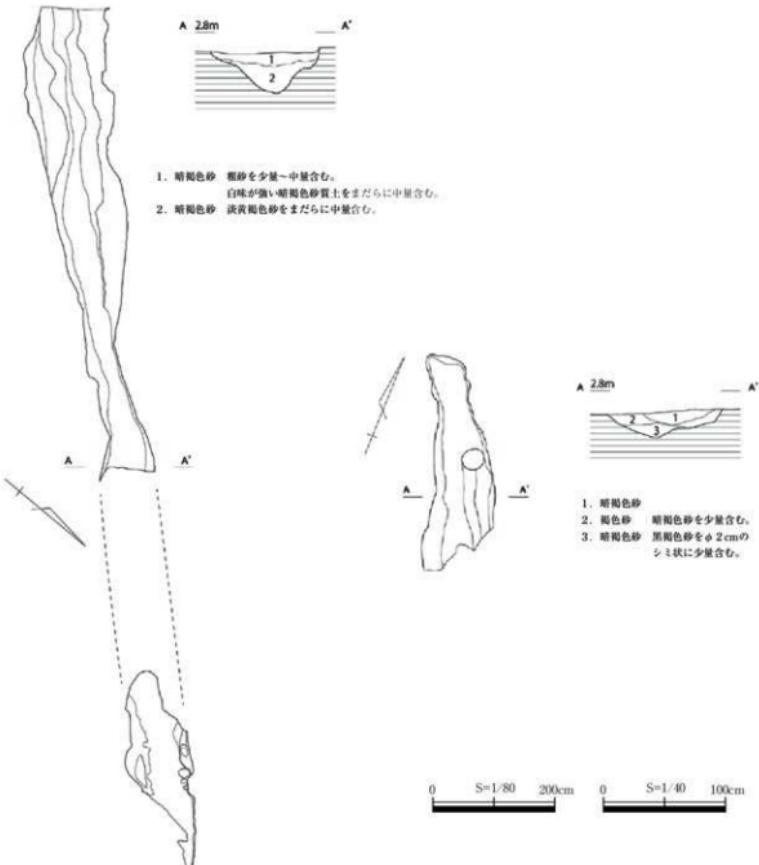
2) 井戸　井戸枠の木材が残り、明らかに遺構の性格が分かるものののみ井戸とした。調査区では2基の井戸を検出した。

SE0067 (第8図)

調査区北東側で検出した。平面は3.34m×2.94mの不整形な隅丸方形である。検出面から底面までの深さは0.31mである。中央やや東側に直径93cmの円形の井戸枠が残存する。井戸枠の中には石と板状の木材が含まれていた。板状の木材は井戸枠が腐食し内側に倒れ込んだものか。遺物は土師器を主体として弥生土器、須恵器、羽口などが出土した。遺構の時期は6世紀末~7世紀初頭頃。

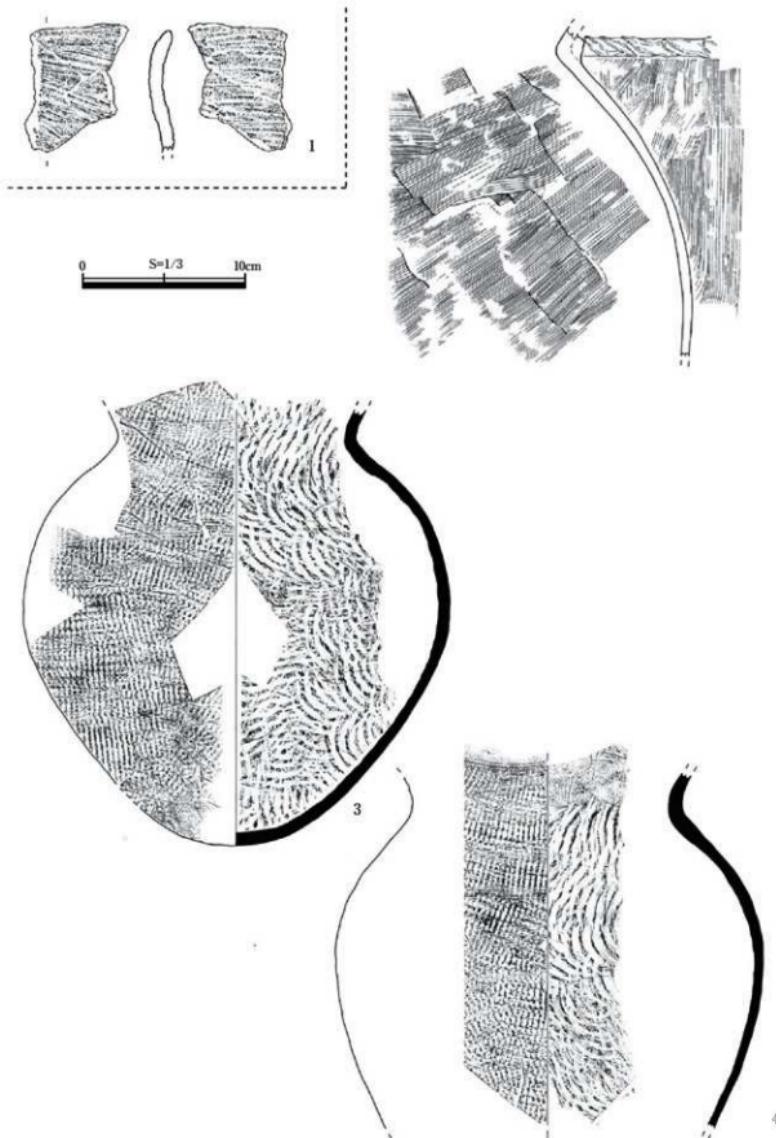
出土遺物 (第9図)

5は弥生土器の壺。口縁端部に粘土を付帯し厚みを持たせ、側面に斜線の線刻を等間隔に施す。内面はオサエ、ナデによる調整を施す。焼成良好だが柔らかい。6は土師器の高杯。杯部のみ残存する。上半と下半は明瞭な境界を持ち、外面下半を中心から外側へ放射状のナナメハケにより調整する。外面中位は工具によって下から斜め上方に向連続して搔きとすることで、稜線を際立たせる。内面は上半と下半の明瞭な境が無く、全体を多方向のナデにより調整する。内外面共に赤褐色を呈す。7は壺。頸部のみ残存する。外面は頸部を始点として上方へ斜めハケ、下方へ縦ハケ調整し、横方向のナデに



第6図 SD0001・SD0093 (1/80・土層断面は1/40)

より全体を調整する。内面はナデにより調整する。外面は赤みの強い橙色、内面は白褐色を呈す。8～12は土師器の甕。いずれも口縁部のみ残存し、全体をナデにより調整する。焼成良好。13は製塙土器。口縁から胴部にかけて残存する。口縁端部はやや肥厚し、側面はナデ調整により平坦に成形される。外面肩部には3条以上の沈線がめぐる。内面は胴部を横方向のハケにより調整する。口縁内面は被熱により変色し、薄く剥離する。外面は淡いピンク色、内面は橙褐色・淡いピンク色を呈す。14は「赤焼」土器。口縁から体部にかけて残存する。15は須恵器の蓋。つまみを持ち、円形に削ることで中心はすり鉢状にくぼむ。16は須恵器の坏。外面は口縁を回転ナデ、胴部をヘラケズリにより調整し、内面は回転ナデにより調整する。口縁は段を持つ。Ⅲ A期。17は須恵器の坏。Ⅳ A期。18は須恵器の蓋。Ⅳ



第7図 SD0001・SD0093出土遺物 (1/3)

A期。19は土錐である。残存長6.3cm、最大径2.7cm、孔径は0.8cmを測る。孔は長い棒状のものを握りながら抜き取ることで作られている。

SE0112 (第10図)

調査区中央東側で検出した。平面は1.02m×1.0mの不整形な円形である。検出面から底面までの深さは0.75mである。中央に直径40cmの円形の木製の井戸枠が遺存する。埋土は灰褐色砂を主体とする。遺物は土師器片が出土した。

3) 土坑 8基の土坑を検出した。この内遺存状況が良好なものを以下に述べる。切り合いが激しく遺構の壁でのみ存在が確認されるものについては、写真図版を参照されたい。

SK0074 (第11図)

調査区西側で検出した。南側は擾乱により消失する。平面は直径220cmの不整形な円形である。検出面から底面までの深さは82.6cmを測り、断面形はすり鉢状を呈す。埋土は暗褐色砂を主体とする。少なくとも3回の掘り返しが行われている。遺物は土師器を主体として須恵器、青磁、羽口などが出土した。遺構の時期は中世。



出土遺物 (第11図)

20~23は須恵器。20は壺。頸部のみ残存し、頸部径5.4cmを測る。

VIA期。21・22は壺蓋。21は復元口径13.2cmを測る。口縁部やや垂直に立ち上がり天井部外面はヘラケズリを行ない、ヘラ記号を施す。IVA期。

22は口径14.0cmを測る。立ち上がりはやや外側に張り、全体は扁平。天井部外面はヘラケズリを行なう。IVA期。23は壺で、IVA期。

1. 灰褐色砂 全体に2~3mmの微点状に純化し、下部に上層土が薄蒸し堆積した褐色砂を少量含む。

2. 灰褐色砂 灰褐色砂を多量に含み、上部の小片を含む。

3. 灰褐色砂 全体的に2~7mmの微点状に純化し、褐色砂が少量混ざる。

4. 灰褐色砂 全体に4mm以下の微点状に純化し、3層よりやや白色がある。

5. 灰褐色砂 全体に5mm以下の微点状に純化する。

6. 灰褐色砂 青味が強く、纖維状に純化する。

7. 灰褐色砂 繊維状の物を多く含み、6層より色調が暗い。

8. 灰褐色砂 全体に2~3mmの微点状に純化する。7層より黒味が強い。

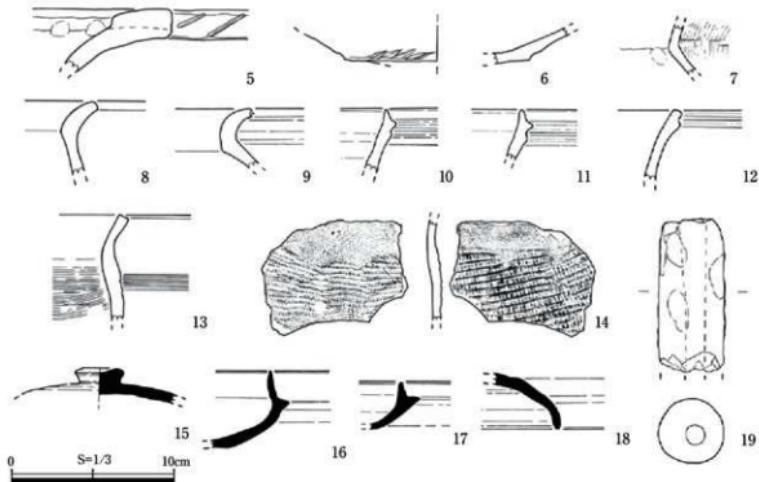
9. 灰褐色砂 9層よりやや黄味が強い。

10. 灰褐色砂 和色砂を少量含む。

11. 灰褐色砂 灰褐色砂をわずかに含む。底面の調整土か。

12. 和色砂 灰褐色砂をわずかに含む。

第8図 SE0067 (1/40)



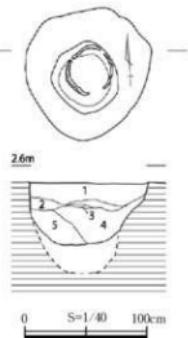
第9図 SE0067出土遺物 (1/3 · 1/2)

SK0099 (第12図)

調査区中央東側で検出した。南側東側と南側は擾乱により消失する。平面は直径155cmの不整形な梢円形である。検出面から底面までの深さは65.5cmを測り、断面形はすり鉢状を呈す。埋土は暗褐色砂を主体とする。遺物は弥生土器を主体とし、土師器、青磁の小片などが出でた。遺構の時期は中世。

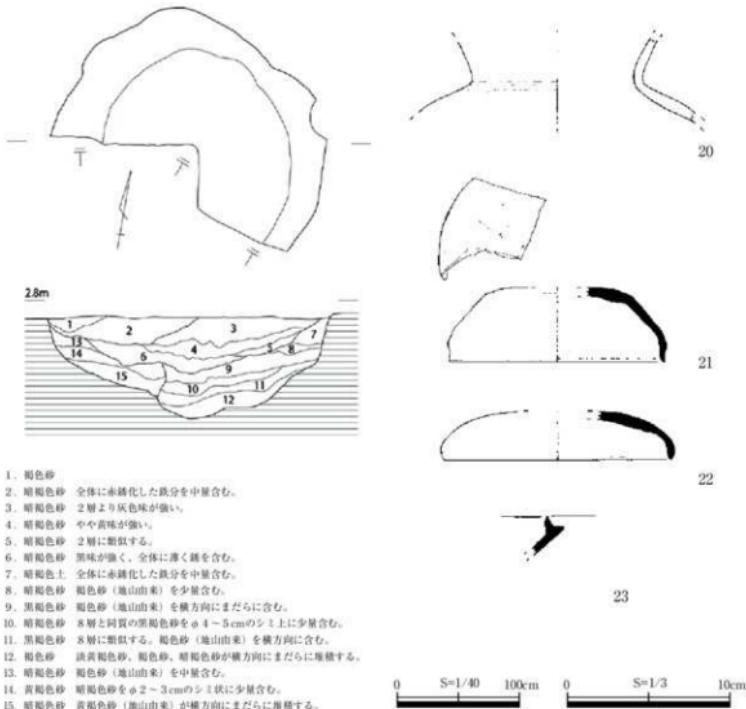
出土遺物 (第12図)

24~27は弥生土器。24は甕。口縁端部は肥厚する。胴部の器壁は5mm前後と薄い。内面は口縁をナデ、頸部から胴部上半を斜めハケ、胴部下半をオサエ、外面を縱ハケにより調整する。弥生時代中期後半。25は丹塗磨研壺。復元胴部最大径24cm、復元底径6.1cmを測る。肩部から胴部最大径部分に2条のM字突帯が巡り、外面は胴部中位まで、内面は頸部まで丹塗りを施し、焼成後、底部中央に直径約2cm程の穿孔が施される。弥生時代中期後半。26は丹塗磨研壺。底部のみ残存しており、復元底径6.4cmを測る。外面全体に丹塗りが施される。外面は下部を縱方向にミガキ、中程は縱方向にミガキ調整した後、横方向のミガキにより調整する。弥生時代中期後半。27は鉢。復元口径32.2cm、復元底径11.6cm、器



1. 灰褐色砂 赤褐色化した鉄分を多量に含む。
2. 灰褐色砂
3. 灰褐色砂 1.、2層に比べ黒味が強い。
4. 黒褐色砂 灰褐色砂をシミ状に中～多量含む。
5. 黑褐色砂 黒褐色砂。尾山由来の褐色砂をシミ状に含む。

第10図 SE0112 (1/40)



第11図 SK0074 (1/40) および出土遺物 (1/3)

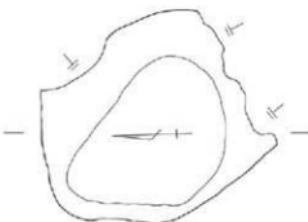
高19.5cmを測る。口縁はやや肥厚し、端部に強いナデを行なう。外面は口縁部から頸部にかけて横方向のナデ調整、胴部は継ハケにより調整する。内面は一部横方向のナデにより調整する。

SK0132 (第13図)

調査区中央北側で検出した。SP0125に切られ、SP0014を切る。南東側は擾乱により消失する。直径132cm以上の楕円形であり、検査面から底面までの深さは75cmを測る。埋土は暗褐色砂を主体とする。遺物は弥生土器、土師器片が出土した。

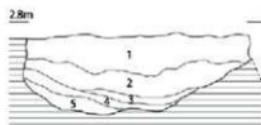
出土遺物 (第13図)

28は弥生土器の壺。口縁部から胴部にかけて残存し、復元口径28.2cmを測る。口縁端部は丸くおさめ、頸部に稜は無い。外面は口縁から頸部にかけて横ナデ、胴部を継ハケにより調整し、内面は口縁から胴部上半を横・斜めナデにより調整する。29は弥生土器の壺。胴部下位から底部にかけて欠損する。復元口径20.4cmを測る。口縁上面は水平であり、端部は側面を強くなることで稜線を作り出し、中央がわずかにくぼむ。肩部に断面三角形の突帯が1条めぐり、胴部は張り丸みを帯びる。外

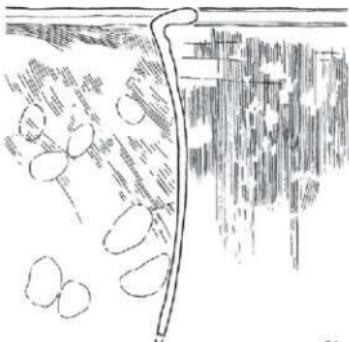


1. 暗褐色砂 より暗い暗褐色を中量まだらに含む。
2. 暗褐色砂 暗青灰褐色砂、灰白色砂、黄白色砂。
褐色砂が横方向にまだらに堆積する。
3. 暗褐色砂 暗赤褐色砂を少量含む。
4. 暗褐色砂 暗青灰褐色砂を中量含む。
5. 暗褐色砂 暗青灰褐色砂が横方向にまだらに堆積する。

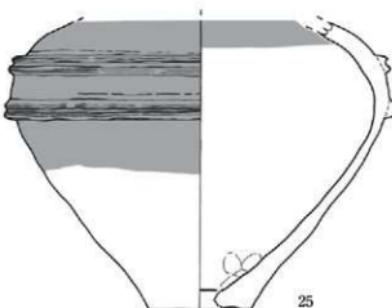
0 S=1/40 100cm



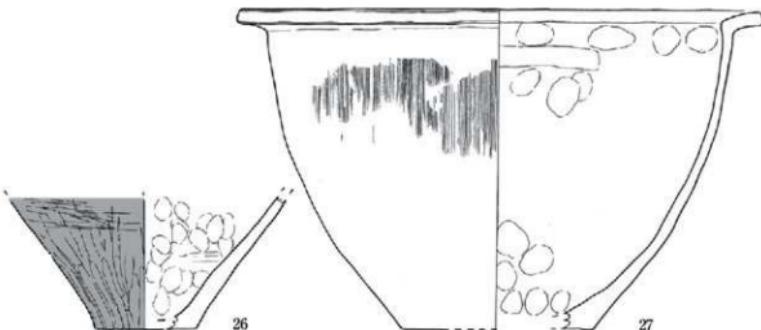
0 S=1/3 10cm



24

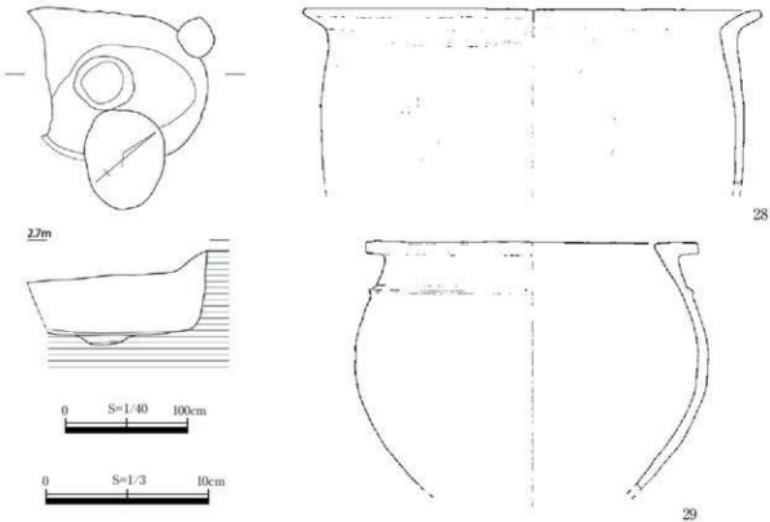


25



27

第12図 SK0099 (1/40) および出土遺物 (1/3)



第13図 SK0132 (1/40) および出土遺物 (1/3)

面は口縁から突帯にかけて横ナデ、体部下位の調整は摩滅により不明。内面口縁から胴部最大径部分まで横ナデにより調整する。

4) その他の遺構・遺物

SP0152 (第14図)

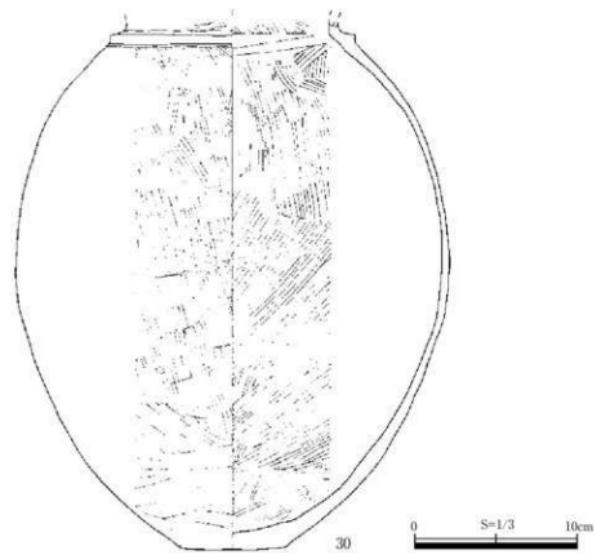
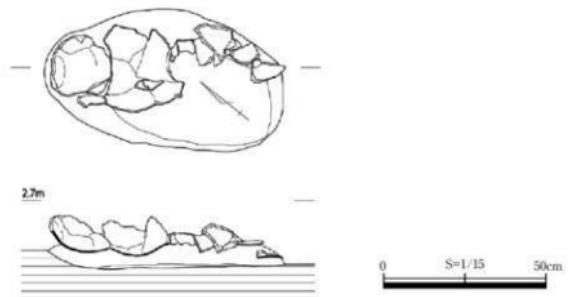
調査区西側で検出した。重機による遺構検出時には遺構上面に壺が露出していたが、重複するSD0093は須恵器を包含する古代の遺構である。SP0152はSD0093に先行する遺構であり、わずかに残る掘方が溝の壁に沿って削平を受けていることから、SD0093掘削時には上部を削平されている模様。平面は長径73cm、短径48cmの楕円形で、検出面から底面までの深さは8cmを測る。埋土は灰褐色砂で、壺頸部まわりの埋土はやや粘性をもつ。遺物は壺が出土した。遺構の時期は弥生時代後期後半。

出土遺物 (第14図)

30は弥生時代の壺。頸部径14.0cm、底径6.6cmを測る。頸部に断面三角形の突帯が1条巡り、胴部は丸みを帯び中程に最大径を持つ。底部はややレンズ状を呈す。胴部外面は斜めハケにより調整し、内面は斜めハケにより調整する。

SP0042 (第15図)

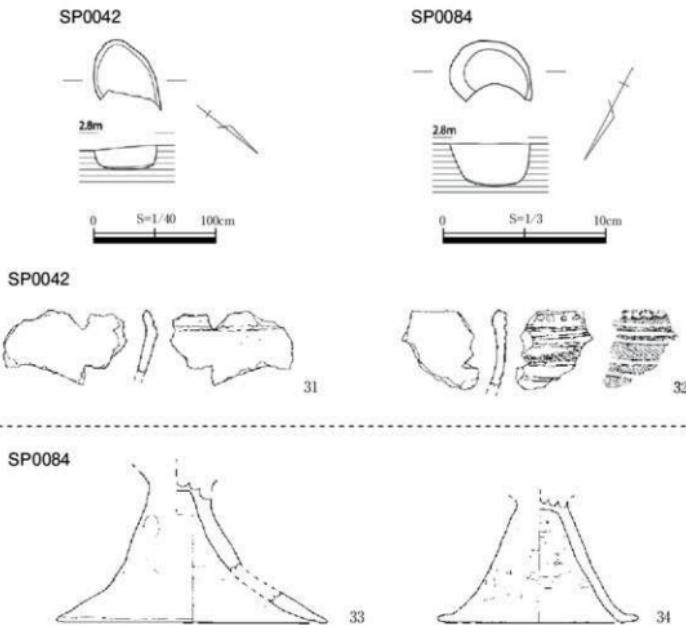
調査区中央南側で検出した。東半は攪乱により消失する。直径52cmの楕円形である。検出面から底面までの深さは20cmを測る。埋土は灰褐色砂質土で、遺物は土師器、縄文土器が出土した。



第14図 SP0152検出状況 (1/15) および出土遺物 (1/3)

出土遺物 (第15図)

31・32は縄文土器の深鉢。いずれも口縁部のみ残存する。31は口縁下に1条の沈線を施す。32は刺突文の下に沈線と磨消縄文を施す。いずれも時期は縄文時代後期。



第15図 SP0042・SP0084 (1/40) および出土遺物 (1/3)

SP0084 (第15図)

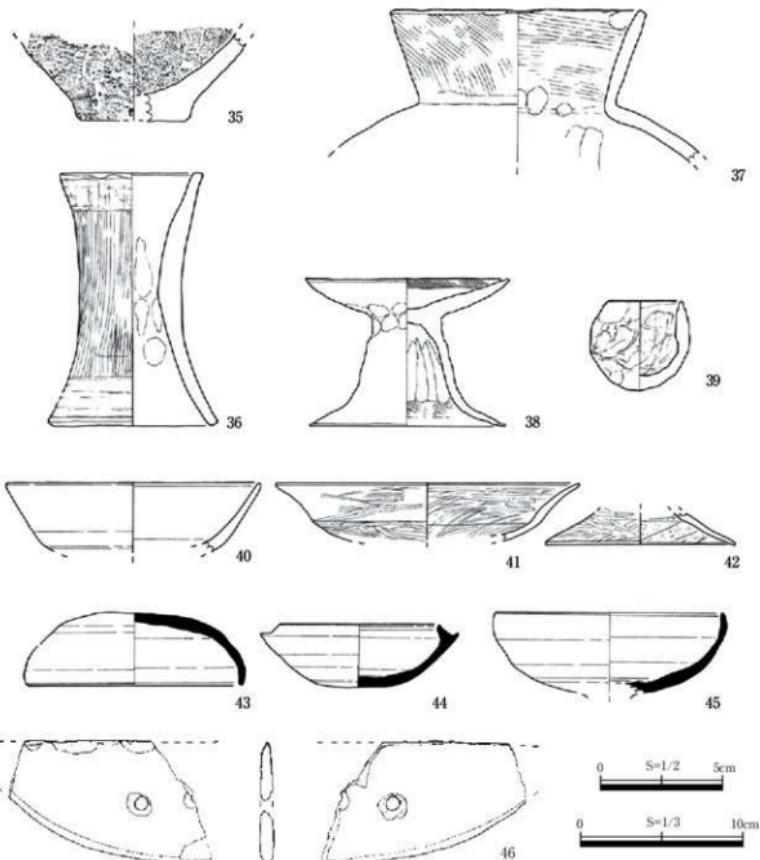
調査区東側で検出した。平面は直径70cmの楕円形で、検出面から底面までの深さは30cmを測る。埋土は灰褐色砂質土で、遺物は土師器が出土した。

出土遺物(第15図)

33・34は土師器の高杯。33は頸部から底部にかけて残存し、復元底径16.6cmを測る。脚部は外面上半をオサエ、下半をナデにより調整し、内面を左から右へ横方向のケズリ、脚部下端をナデにより調整する。内面はケズリの際工具に引きずられることで表面がひび割れている。時期は古墳時代。34は頸部から底部にかけて残存し、復元底径12.6cmを測る。脚部は直線的に広がり、裾部は短くわずかにはね上がる。外面は強い横・斜めナデのうち頸部のみ横ナデ、内面を横方向のナデにより調整する。外面はナデによる調整で筋縫のひび割れが全体に入る。調整は丁寧に行なわれ、胎土は粗いものの表面は殆ど石英粒が露出しない。

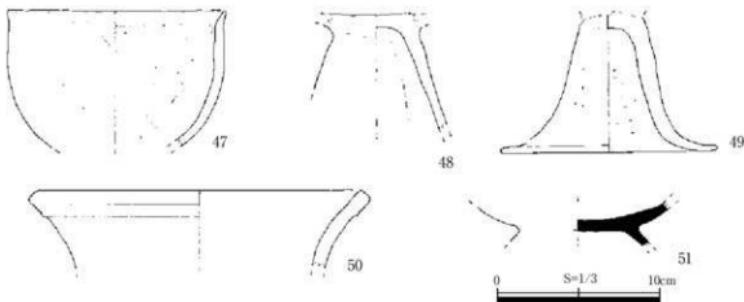
その他の遺物（第16図・第17図）

35はSP0052から出土した縄文土器の深鉢。復元底径6.4cmを測る。外面全体に貝殻条痕を施す。縄文時代後期。36はSP0062から出土した弥生土器の器台。ほぼ完形で、口径8.8cm、底径10.4cm、器



第16図 その他の出土遺物① (35~45 S=1/3・46 S=1/2)

高15.5cmを測る。外面は全体に縦ハケを施した後、上下端を2.5~3cm幅で横ナデにより調整する。内面は胴部を縦方向のナデで整形した後、上端から2cmの幅で横ナデにより調整する。胴部のナデは中心から外へ向かい、上下両方向から行われる。37は土師器の壺。復元口径15.8cmを測る。頸部は直線的に開き口縁端部はナデにより面を形成する。外面を斜めハケ、内面頸部を横ハケ、胴部を縦方向のヘラケズリで調整する。38・40~42は土師器の高杯。38は口径12.4cm、底径12.0cm、器高9.0cmを測る。杯部は口縁端部へ厚みを減じ、端部内面は斜めハケを施す。頸部はオサエにより整形し、脚部は直線的に広がり、緩やかに屈曲し裾端部は厚みを減じる。脚部内面は縦方向のナデ調整の後、裾部を斜めハケ調整する。39はSP0144から出土した手捏ねのミニチュア土器。口径4.7cm、器高5.5cm



第17図 その他の出土遺物② (1/3)

を測り、底部は丸底である。40はSP0087から出土した土師器の高坏。坏部上半のみ残存する。胎土は細かい。内外面全体をナデ調整する。坏部底と上半の境に緩やかな屈曲を持ち、やや曖昧な稜線が見られる。内外縁共に橙褐色を呈す。口縁端部は丸みを帯びわずかに内湾、わずかに厚みを減じる。41・42はSP0100周辺検出時に出土した土師器の高坏。41は坏部のみ残存する。胎土は細かく精製。底部はゆるやかに張り出して丸みを帯び、坏部上半は口縁へ外反しつつ広がり、口縁は厚みを減じる。内面・外面ともにミガキ調整で、内面は坏底部を底部中心から外側へ放射状に磨く。立ち上がりから上半は横方向にミガキ調整する。外面は底部・立ち上がりと共に横方向を中心とした多方向のミガキにより調整する。また、外面はミガキにより立ち上がりと底部の境界を、稜線をもたせて明瞭に表現する。外面・内面共に赤褐色を呈す。42は脚部のみ残存する。胎土は細かく精製。脚部の裾部の残存であり、やや膨らみをもちつつ広がる。端部はやや丸みを帯びて内側にわずかに弯曲し、厚みを減じる。外面は横方向を中心とした多方向のミガキにより調整し、内面は工具による成形の後、横方向にナデ調整する。内面にミガキ調整は全くない。外面・内面共に赤褐色を呈す。43～45は須恵器。43はSP0082から出土した坏蓋。復元口径13.2cm、器高4.5cmを測る。IV A期。44はSP0157・SP0158で出土した坏。復元口径9.8cm、器高3.9cmを測る。外面上半は回転ナデ、下半は回転ケズリを行う。IV A期。45はSP0111から出土した無蓋高坏。坏部のみ残存しており、口径14.0cmを測る。IV A期。46はSP0165から出土した石包丁。残存長8.3cm、最大厚6mmを測り、直径約5mmの孔が2点穿たれる。穿孔間隔は1.7cm。穿孔・刃部形成共に両面から調整を受ける。

47～51は1・2区包含層より出土した。47は1区包含層から出土した鉢。口縁はやや厚みを減じ緩やかに外反する。外面は一部磨滅により様相不明だが、胴部上半は多方向の短いハケ調整を施す。内面はオサエにより成形し、工具により斜め方向に調整する。外面にはスヌが付着する。 ϕ 1.0～1.5mmの石英粒を中量含む。外面は暗褐色、内面は橙褐色を呈す。48は1区包含層より出土した土師器の高坏。脚部のみ残存する。内面は下から上方に向へ強いナデにより成形する。外面は坏部と脚部の境をやや強く横ナデすることでわずかなくびれを持つ。脚部全体は直線的であり、全体を横ナデにより調整する。内外面共に淡い橙褐色を呈す。49は2区包含層より出土した土師器の高坏。脚部のみ残存し、復元12.6cmを測る。脚部はやや膨らみつつ直線的であり、裾部で明確な境界は無く、端部はわずかに反り上がる。外面は縦方向のハケ、裾部は横ナデ、内面は工具により横方向に調整する。内外面共

に黒褐色を呈し、胎土は ϕ 0.5~3.0mmの石英粒を多量に含む。砂粒は内面ほど顕著に露出しており、外面は砂粒が目立ちにくくように調整される。50は1区包含層から出土した壺。口縁部から頸部にかけて残存し、肥厚する口縁には2条の沈線がめぐる。口縁上面端部はナデ調整により平坦で丸みを帯びた角をもつ。外面を横ナデ、内面をオサエのちナデ調整する。外面は淡褐色~赤褐色、内面は黄褐色を呈す。51は1区包含層から出土した脚付壺である。壺底部から脚部上半にかけて残存する。胴部外面・脚部内面に回転ナデ調整、胴部底部内面は多方向の指ナデにより調整する。内外面共に灰色を呈す。

IV.まとめ

溝2条、井戸2基、土坑7基、その他多数のピットを検出した。遺構は6世紀後半~7世紀前半頃を主体としつつ、弥生時代、古墳時代、中世のものを検出した。遺物は6世紀後半~7世紀前半の土師器を主体としつつ、縄文土器、弥生土器、須恵器、製塙土器、青磁、土錘、石包丁、少數の鉄器片などが出土した。土器は土師器片が圧倒的に多く、大半が小片であるため、遺構には時期を明確にできないものが多数存在する。

縄文時代の遺物は、SD0001、SP0042で条痕文の深鉢、SP0052で条痕文の深鉢、凹線と列点文・磨消縄文をもつ頸部片が出土した。遺構はいずれも後世のものであり、当該期のものは見られない。弥生時代の遺物は、中期から後期にかけた壺、器台などが多数の遺構と包含層から出土した。ただしこれらの遺物はいずれも土師器と共に出土しており、弥生時代の遺構と考えられるのはSP0152のみである。古墳時代の遺物は前期から後期にかけた土師器・須恵器が出土しており、特に土師器は壺の他に高杯が複数出土している。また、これまでの吉塚遺跡の調査地と同じく、内外面を叩きによって調整する赤焼土器が小片ながら遺構内外で多数出土した。古代の遺物は6世紀末から7世紀初頭の須恵器・土師器が出土し、遺構は井戸や土坑、ピットを検出した。本調査地で検出した遺構の殆どは当該期に属する。中世の遺物は殆ど無く、僅かな青磁片がSK0074、SK0099で出土したのみである。いずれも小片であるため明確な時期比定は困難だが、周辺の調査結果とあわせて、これらの遺物をともなう遺構は中世前半期のものと考えられる。また、古代の井戸であるSP0067で土錘や製塙土器が出土しており、海、海浜部との関わりをうかがわせる。

今回の調査では、吉塚遺跡で初の事例となる縄文土器が出土した。いずれも後期の西平式のものと考えられる。吉塚遺跡の周辺で出土した遺物は、吉塚本町遺跡の縄文時代晩期の土器が最古であり、それ以前の事例は無い。今回の出土例によって、吉塚遺跡周辺で縄文時代後期には生活圈が存在していた可能性が指摘された。今後の事例の増加が期待される。また地形について、弥生時代の遺物が一定量出土するものの遺構が殆ど検出されない状況は、南側で行われた第5次調査の状況と同様であり、第5次調査時に指摘されていた中世における大規模な削平と砂丘の地形変化は、本調査地点でも行われていたことが判明した。



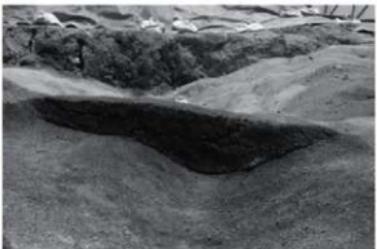
(1) 1区全景（北東から）



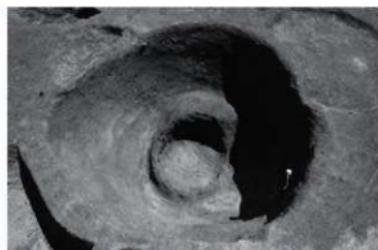
(1) 2区全景（北東から）



(1) SD0001土層断面（東から）



(1) SD0093土層断面（北から）



(3) SE0112（北から）



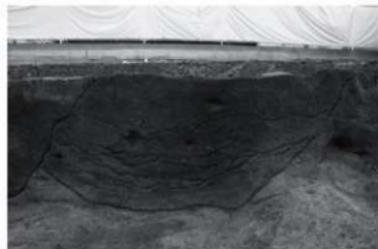
(4) SE0067（東から）



(5) SE0067井戸枠検出状況（南から）



(6) SE0067井戸枠内完掘状況（南東から）



(7) SK0142土層断面（南から）



(8) SK0134土層断面（北西から）



(1) SP0100検出状況（西から）



(2) SP0152検出状況（北西から）



1



2



3



4



6



13

(3) 出土遺物 ①



(1) 出土遺物 (2)



35



36



38



39



44



46



49



50

(1) 出土遺物 ③

報 告 書 抄 錄

吉塚 12

— 福岡市埋蔵文化財調査報告書第1436集 —

令和3年3月25日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 有限会社 森田印刷所
福岡市中央区大手門2-2-25

